

# 特別研修

## 月例研究会 議事録 ( 5 月 )

2009 年度 第 1 回

報告題名 地場資本における共同性の構造：戦前の三陸汽船会社を事例に	
報告者 佐藤文吉	日時 5月28日 午後3時～
(所属分野) フィールド社会技術学分野	場所 第7講義室
座長 村松 (優)	議事録担当者 水木
出席者 木谷、両角、米澤、大村、米倉、冬木、川島、工藤、伊藤、石井、澁谷、菅井、鹿嶋、小山田、佐藤 (文)、張、韓、デッフィ、松井、村松 (優)、スチン、ガンボルド、金、ソ、八木、柳瀬、安部、神浦、佐々木、福田、水木、宮里、渡邊、山下 (幸)、月僧、今野、鈴木、滝田、中村、山下 (広)	
<b>報告要旨</b> 『農業経済研究報告』第 40 号(2009 年)で、「地場資本の機能と限界:明治期の三陸汽船会社を事例に」を発表した。しかしこの拙稿では、商人らが結集した地場資本とその要素としての共同性の関係については言及していない。今回の報告では、次の構成の通り、分析範囲を拡大し、共同性の解明をはかる。	
序 章 目的：社会資本の整備に結集した商人らによって形成された 地場資本の共同性を明らかにする  課題：共同性がどのように形成され、そして変容したのか ：共同性の調節要因とはなんであったのか ：調節要因が機能しなくなったのはなぜなのか ：なぜ資本の転換ができなかったのか	
第 1 章 社会資本整備と商人の共同性	
第 2 章 三陸汽船会社の展開過程	
第 1 節 汽船会社の設立要因と初期の展開 (明治 40 年～大正 2 年)	
第 2 節 釜石鉱山田中製鉄所 (田中鉱山) の位置づけと 組織構造の変化(大正 3 年～大正 9 年)	
第 3 節 三陸沿岸主要港湾の機能変化と塩釜商人(大正 10 年～昭和 7 年)	
第 4 節 鉄道網の発達による海上交通の衰退と北海道資本 (昭和 8 年～昭和 18 年)	
第 3 章 三陸汽船と阿波国共同汽船の比較検討	

## 質疑・応答

澁谷：今回は地場資本について定義したいという発表だったが、佐藤さんの考える共同性の定義について知りたい。利益の共同性は、談合とは違うのか。終章での調整軸とは談合ではないのか。地域の中での利益分配ではないか。

佐藤（文）：談合という規定の仕方がよくわからない。一概に談合と言われても何が談合に含まれるのか。

澁谷：簡単に言えば、モノの値段をみんなで相談して決めること。

佐藤（文）：建設業を想定すると、例えば、建設業の入札における談合とは異なる。カルテルの意味合いは多分にあるが、談合という言葉は私の考える共同性に含まれない。カルテルはあるが、談合を含めると、この研究をやるには別な視角が必要になる。あくまでも、組織の共同性の源流が何なのかを知りたい。一般的な談合とは別の話である。

澁谷：しかし、共同性の構造図を見るとベースは利益の共同性ではないか。

佐藤（文）：これは商人なので、流通機構からの収奪という考え方で60～70年代やってきていた。商人の地域社会における役割期待はそういう考え方ではないのではないか。という今の学会の流れがある。

澁谷：佐藤さんの考える共同性とは何か。

佐藤（文）：共同性、共同体論は様々あるが、私の共同性は、商人の共同性を規定しようとしている。商人の共同性とは、簡単な話で言うと、地域社会と対抗しては、自分たちも儲けられないという考えがある。だから、地域を良くしないと自分が良くなる。これが私の考える共同性である。これは歴史学の過程から導き出せる共同性である。

冬木：全体の話はわかったが、これは博士論文の全体の構成ですよね。序・1章でいわれている共同性、あるいは商品の社会性みたいなことをいわれている。そこでやりたいことはわかるが、それが三陸汽船の展開過程の中でどういうふうに活かされているのかを確認するのが博士論文のポイントになるのかなあと思った。

佐藤（文）：まさにその通りです。